



中央区唐人町 善龍寺楼門
亀井南冥書「瑞雲」の掲額

大儒 亀井昭陽伝(二)

亀井学を大成した

ここで南冥・昭陽父子の当時の状況など説明を加えておこう。

昭陽十三歳、父南冥が秋月藩主長舒公の召命により、公の侍読（貴人に講義する役。侍講ともいう）を受けるに当り本藩学務などで出仕できない時は長男昭陽に代講を許されていた。

右は、亀井家の『万曆家内年鑑』天明五年の項に「昱従家公始如秋月見朝陽公」昱、家公（父をいう）に従い始めて秋月に如き朝陽公に見える、と記録がある。おそらく、南冥に藩主の侍読の任命は、同藩から事前に交渉があり、これに南冥は福岡本藩の東西学問所の開設二年目、南冥自身が西学問所総受持兼教授として多忙を考え、昭陽代講のことも承認を得ていたと思われる。

秋月藩の南冥依囑は、同藩士で本藩西学問所開設と同時に留学した原震平（古処と号す）の進言とされる。原古処は、入学後すぐに南冥に学才を認められ本藩の通学生と諸藩の

・昭陽の学力と

秋月侯の信頼

・秋月侯と上杉鷹山

帰藩するが、昭陽に七歳の年長である。昭陽の学力も古処によく知られ、兩人は終生変わらぬ親交を持った。

秋月と福岡の里程は、昔から千里道（いまの四十軒）といわれ、現代では道路状況に変化が見られるが、およそ距離は変わっていない。徒歩で、健脚者ならば一日がかり、それでも福岡の出發がおけると季節によっては夜道になる。父の場合は秋月宿泊で、常に藩主講義を終えると「御酒下され」となって、殿様に家老たちも陪席を許されて宴会となる。

翌日は藩からの乗物で城下を出發。秋月はずれの依井で町駕籠に変わる。南冥が、本藩要件で急ぐ必要がある場合は、早駕籠の使用が認められていた。

また南冥は秋月往復には必ず槍持ちと下男を従える。これは南冥の武士身分（天明五年、知行百五十石となる）に認められた格式であった。南冥自身、こうした体裁と行装に案内と強い執着を持っていた。

留學生多数に注目される存在になった。

古処は、翌天明六年まで二年余の在学中で

昭陽の場合は、下男を従えるだけで、これに書物と着替えの衣類を持たせる。殿様に進講するため袴を着用、これに相應の衣類は、道中衣で済まされたいためである。

十三歳の昭陽が父親に代って秋月侯に進講を果し得たか、どうか。昭陽の学力を以下に述べてみよう。

明治四十年、大阪朝日新聞記者の西村天因が「…(前文略)此の次、九州へと志しつるは、鎮西の大家として其の名声、海内に震いし亀井南冥、同じく昭陽の父子、…」の事蹟を搜訪せん…以下略」と述べた取材記事は、同年六月二十六日から大阪朝日新聞に連載される。

この中で「亀井昭陽」の書き出しを次に記述するが、本文は明治調の文章と難解な字句について現代文に転換する。

「亀井昭陽は、儒学界の実力者である。九州における経学(孔子による論語はじめ四書五経など中国古典をいう)の第一人者とされる。

三浦梅園は著述は多いが、経学において、とくに長じているとはいえない。

古賀精里は一代の成果が見えるが、朱子学の拘束にとらわれ過ぎている。

帆足万里は四書五経を専ら校注するとしながら、なお雑学まじりの低調が見られる。

安井息軒は、経学を看板にした文章家に過ぎない。

このほか、詩或は文章を以て学業と実践を唱えな名声を高めんとする者多数であるが、本来の経学においては、思うに昭陽の大成が認められる。

人物としては南冥が上であるが本分の経学に於ては昭陽が断然、優れている。昭陽は、独り亀井家学を大きく担って儒学に覇を唱え、当時の儒者に於て右に出る者なく、また天下の大学者として、反論はないと、断定される。

昭陽、名は昱、字は元鳳、昭陽は号にして、別に月窟、又は空石、天山遜者と号せり。通称は昱太郎、南冥の長男にして、安永二年癸巳八月十一日福岡の唐人町に生まれたり。

昭陽が少年時代の刻苦勤学は尋常に非ず。幼より家学を受けて、十四、五の時には、すでに経史(経書と史書)を涉獵(広く深く、多くの書物を読むこと)せり。以下、(昭陽の青年期からの著

書名を掲載しているが省略)。

此の時期には飯を食うにも書物を臍脇に置き、道を行くにも文章の腹稿を考え、如何なる人の家に入りするにも懐中に小冊を携えて、寸分の暇にも之を見つつ、空しく時を過ごさず…父の南冥は弟の曇榮禅師に「昱太郎の勉強は、とても我等兄弟が少時の刻苦も及ぶところにあらず」と語る。

現今の子弟の十七、八は、なお中学時代なり。学問の内容、同じからずとしても、其の読書力は知るべきのみ。しかも昭陽は当時すでに書経考と詩経考の著書あり、その刻苦勉学の精力、普通人に卓抜なくば絶対に出来ることなし、とする。

次に西村天因は、長崎県の旧平戸藩の針生島に、旧藩儒の楠本碩水翁を訪ねて、翁が少壮の時に従游した先儒(先輩の儒学者)の逸話を聞き、好材料を得ている。(次に一部を抄出する)

塩谷宏陰ノ文ト淡窓ノ詩トハ鍛練ノモノゾ。ソレデ中国人ハスクソ。日本人ノ詩ハ霸氣ガ多イゾ。殺伐ナ風ガアルゾ。溫和ニナイゾ。詩ノ本意ガ乏シイゾ。声響ト言フコトハサツパリナイゾ。

淡窓ハ眼病デソレカラ読書ハヤ

メタトミエルゾ。読書ハ至ッテ狭イゾ。ソレデモ読ンダコトハ覚エテ居ルゾ。問ワレタレバ、知ツタコトハ直ニ答ヘルゾ。知ラヌコトハ知ラヌト言フタゾ。ウソハナイゾ。再ビ問フコトハイラヌゾ。

眼病デナカッタトモ、志ガ小サイユエ、書ヲ博ク読ムコトハセヌ人デアッタラウ。高尚ナ人デハナイゾ。書生ヲ育ツルコトニ汲々トシタモノゾ。渡世ノ為ゾ。

又、天因は碩水翁から亀井昭陽評も次のように得ている。

「本邦儒学の徒にして学力ある者は、伊藤仁斎父子、物徂徠にしくはなし。亀井昭陽繼いで起り、その経説に於ては遠く伊物(伊藤仁斎と物徂徠のこと)の上に出づ。ただ西陲に僻処し、その学わずかに一方に行はれて広く天下に及ばざりしのみ。」

右の碩水翁の昭陽評は、天因の亀井観をさらに確信深いものにしたと思われる。

以上、昭陽の学力について、明治期の朝日新聞記者・西村天因の詳細な観察を紹介した。

十三歳の昭陽がよく秋月藩主に学問進講を果し藩主の信頼を得たこと

能古博物館だより

は、昭陽の学識に非凡を認められたことなる。これを機縁にして本支藩を越えた両者の敬愛は、この後の本稿につながりを見せる。

時に、秋月藩主は二十歳。天明五年三月、日向高鍋藩主秋月種頼の二男から筑前秋月七代藩主黒田長堅の遺愛を受けて、その八代藩主を継いだ。秋月の地は、その姓氏に知られるように秋月家発祥の郷土であり、青年藩主にとって多感をとまなわれたとされる。いま一つは、叔父に当る(父種頼の実弟)上杉鷹山にあやかりたい思いである。叔父君は、羽州米沢藩十五万石、戦国の名将上杉謙信公直系の家柄で徳川時代の大名家の中で、とくに誇り高い名家。例えて將軍徳川家も比較にならない重みがある。そのため代々の家臣層にも重厚さがあり、こうした家格に内在する家臣団に叔父君の苦心は厳しさがあつたと、いまの長舒の境涯において推察され、なお今日すでに名君の評判が聞かれることに強い敬服が生じるのである。

長舒は、叔父君鷹山公と出来得れば江戸参勤の時期を同じくして、指導を受けた。そのため自らの学問教養はもとより藩士のために藩学校の制度と充実も切実になる。

秋月藩の教学は、藩儒原家に始まる。原家は、筑前怡土郡の高祖城を本拠とする原田氏の一族であつたが、享保三年秋月藩黒田家に仕えるに至って「原」一字姓に改めた。

以後、藩主の侍講役として代々儒学を家業にし、担斎で三代となる。担斎の代に、当時の藩主長堅によって小規模ながら藩校「稽古亭」を設けて藩士教育に充て、担斎は師範役に就いた。このため藩主の宰配で稽古亭を城下の新小路に建設と同時に原家に隣接屋敷を与えられた。

担斎には嗣子がなく、同藩馬廻組士の手塚甚兵衛二男、震平(号占処)十六歳を養子にする。占処は、幸いに好学の気象があつた。天明四年、福岡藩の学校設立と同時に、養父担斎に支持されて西学甘棠館の亀井南冥に学ぶことになる。

原家は代々、福岡藩儒の竹田家に就いて朱子学を修めた。このため担斎が、古処に徂徠学で知られる甘棠館に留字させた理由は明らかではない。

新藩主長舒は、襲封の翌天明六年になると、藩学校の充実に積極さが見える。これは、亀井南冥に全委任することになるが、次の南冥書簡によって詳細がわかる。よって原文を下段に読み進めることにする。

(前文三行を省略、四行から読む)

去ル四日

君侯 学館に入らせられ輪講を御聞き成され 其後人拂にて

私一人 召出され 当番之御納戸頭一人侍側

悉く 学館の儀を沙汰 惣じて

大小盡して学事は私に委

任申し申し付けられ候 愉快千萬

君候之一言千金と難有

存じ奉り候 数年之小学境界も

免し申され候 旁々 △△(虫喰い文字)

△△此に於て乎喜び知る可き也

憚り乍ら老先生にも仰せ上げ

己後学館之事ハ私より

直に申出で候様に相成り中途に

雲霧晦冥之憂い 無之く候

大夫様始め 大きやうてんにて

御座候也

閏月七日

原士先生 狂儒百拜

(原 土萌を原士に略す)

この後、本藩西学に修業した原古処を秋月藩校の訓導に。これに昭陽を、また本藩西学に勤める訓導の内から山口白賁を兼務加勢に加えた。もとより教授職は、南冥の兼任で

昭陽の学識に非凡を認められたことなる。これを機縁にして本支藩を越えた両者の敬愛は、この後の本稿につながりを見せる。

去ル四日 君侯 学館に入らせられ輪講を御聞き成され 其後人拂にて私一人 召出され 当番之御納戸頭一人侍側 悉く 学館の儀を沙汰 惣じて 大小盡して学事は私に委任申し申し付けられ候 愉快千萬 君候之一言千金と難有 存じ奉り候 数年之小学境界も免し申され候 旁々 △△(虫喰い文字) △△此に於て乎喜び知る可き也 憚り乍ら老先生にも仰せ上げ 己後学館之事ハ私より直に申出で候様に相成り中途に雲霧晦冥之憂い 無之く候 大夫様始め 大きやうてんにて御座候也 閏月七日 原士先生 狂儒百拜 (原 土萌を原士に略す)

南冥は、左氏春秋の会説を従来につづき主催する。これには訓導の原古処と昭陽も出席させ、藩主長舒公の臨席がある。普通講義は、昭陽が

ある。 南冥は、左氏春秋の会説を従来につづき主催する。これには訓導の原古処と昭陽も出席させ、藩主長舒公の臨席がある。普通講義は、昭陽が

論語と書経。原古処は詩経を担当した。このほかに原古処は、初級者のため孝経と小学を講じる。

また、秋月藩の中老格（この職までを藩重役とする）吉田彦太夫の四男で左膳（字煥之、号九華）が本藩西学甘棠館に留学中を、翌七年三月に修了と同時に訓導を予定した。

句読師（入学生の初歩過程で素読を指導する）として、少年ながら利発で将来を見込める鶴沼紀四郎を起用した。紀四郎は、後に吉田九華が若くして急逝すると、藩主長舒は遺愛を厚くして九華の跡を同姓別家を立てる、このため紀四郎を死後養子として相続させたのである。これによって紀四郎は、吉田平陽を名乗り、藩校訓導、次いで教授に進む。

さらに平陽は、教授のまま、学力と手腕を認められて、郡奉行に累進し後に、財政担当の中老職に登用され実績を挙げた。

とくに、藩主の参勤による江戸滞在一年余の間は、平陽を定府（藩の江戸屋敷に常勤して役職に就く）勤役として藩政に参与させた。この期

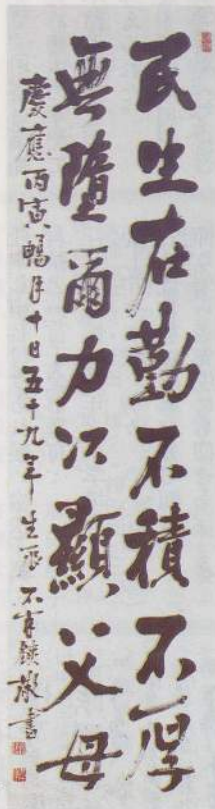
間、平陽はとくに許可を得て、幕府の儒官上席で湯島聖堂の昌平校首席教授を兼ねる佐藤一斉（陽明学者）に学んだ。これに佐藤一斉は、さすがは亀井南冥・昭陽の薫陶（すぐれた学問を身につけ、人を感化できる教養と人格者をいう）がうかがえる。

すでに我ら（佐藤一斉自身のこと）の教えることなし。諸子と交わり、悠々と遊べよ、と賞詞し、さらに山間の小藩にして大藩も及ばぬ藩学である、と。率直な評言をした。



亀井 昭陽 書

昭陽は、「民生に在勤するも積ることなし」と書き、学問を民生に活かすことは、己れが士大夫として要路に立つ以外にないと痛切に認識していたのである。



亀井 陽洲 書

この本領は、後嗣の陽洲にも伝えられており、後に陽洲も揮毫する。この書は、陽洲が平常に見せる書風にな

い格調と年月、年齢まで書き添えており、父同様に後代のためにしたとされる。昭陽が藩政と当局者に強い批判を有していたことは、よく認められる。例えば、昭陽が烽火台番として十日上番、十日非番を約二年余にわたって勤めた記録『烽火日記』には、秋月藩主長舒公に好遇された遺徳を讃えながら、本藩については激しい批判を書きつらねている。

「人間間職。この間地につく。また太だ間なり」と。これは烽火日記中のわずか一句に過ぎない。つまり人間間がつまらぬ職をおつまらなくしている、とする。

同書には、書きながらもその激越に自ら削除した二百九十三字の行文に頭註して「妄意するに、此一段、

時儀に涉れば、削去して如何」と、文空間を生じた註記である。

余人による注意の指導に従って削ったようにしているが、昭陽自ら削除した残念を表したとされる。

いづれ、昭陽烽火日記は全文訓読で本誌に連載し、その名文調を紹介したい昭陽第一級の作品である。

明治期「亀井南冥・昭陽父子の学問」に注目した西村天囚の紹介

前稿で西村天囚による亀井父子の学問業績と調査を再三掲載しているので同氏の概要を参考に述べておく。天囚は、名は時彦。「朝日新聞」のコラムとして有名な「天声人語」の命名者である。

慶応元年、鹿児島県の種子島で父城之助長男に出生。

よ り だ 博 物 館 古 能

号 15 第 (5)

西村家は、史上有名なポルトガル船が種子島に漂着、種子島銃を伝えた時の地頭職であった西村織部丞時貫を先祖にする。島守の種子島家は元々平家一門で七百余年の名門として南海の治平に尽くし、西村家はその宰配に入っていたのである。江戸期島津氏による南島侵略を受け、屈辱の支配を受けるが以来永く遺恨とされていた。天囚は七歳で郷儒前田豊山に漢籍を習い、十六歳上京し重野成斎などに師事。十九歳、東京大学古典講習科に給費生として入学。二十三歳、給費制廃止により退学。以後は作家生活に入り文名を知られる。明治二十三年「大阪朝日新聞」記者となる。同二十六年、天囚二十九歳折柄シベリア横断の福島安正中佐の

壮挙を知る、国民もかたずを吞んで快挙の成功を見守っており、これに天囚は特

派され三カ月以前にウラジオストックに待機。福島中佐に同行して東京に帰り、同中佐が軍報告を終えると箱根休養に起居を共にして、その困苦に満ちたシベリア単騎大旅行の詳細を記録した。これによって朝日は独占記事とし『シベリア横断単騎遠征録』の題名で連載の成功を収めた。

以来、天囚も陸軍上層に信用を得る。三十二年、天囚は宿願の「南島偉功伝」を著述して種子島氏の功業を表明、幸いに同著は明治天皇の天覧に浴し、これによって種子島安時は男爵に任ぜられたのである。

また、わが文庫が志す亀井家学の業績についても、明治期すでに資料流出の中に、まだ相当の纏まりがあり天囚の熱意もあって、明治四十年五月から三回目的九州探訪の中で、亀井南冥・昭陽父子の学問に調査記録をよく記事にとどめ、これによって今日我々にその研究のいとぐちを与えてくれたのである。

また、こうした天囚の努力にも門を固くして資料閲覧を容易に感じなかった家もあった。

これが今宿の亀井小栗家である。いまその状況を次に述べておく。以下、天囚記事をそのまま掲記するが、一部仮名使いを現代調にした。

「姪の浜を過ぐ。海辺の一部落にして市街の姿を為せり。此処ぞ亀井南冥の出生せし処なり。又も松原を過ぐ。……松原の尽くる処、即ち今宿なり。産霊の祠あり。其の傍らなる細長き家ぞ即ち小栗の旧居なり。格子戸を入りて訪なえば六十余りと見ゆる老婦、針仕事の手を留めて誰ぞとあり。これこれの者なるが、世に名高き小栗女史の昔話など承りたく、又、其の書残された書物などあらば拜見したくなど、ねんごろに語りしに、未亡人は左様に候うかとばかりにて、はかばかしき答えなし。大阪よりわざわざ参りたるものを何にてもあれ、小栗の筆跡も見ずしては、千里を遠しとせず来りし甲斐もなしと、言葉をつくし頼みしに、ようやく疑心も解け、さらばと身を起こして奥に入れり。

思うに孤兒、寡婦を欺くもの多き世の習いに、見も知らぬ我を疑い用心せしにあらん。この用心ありてこそ、寡婦は、家を保つに足るらん、とする。

やがて持出したるを見るに『左伝續考』三十冊、『尚書考』六冊、其の外に雜書若干あり。『尚書考』には『天保四癸卯夏五写、友』の奥書あり。友は小栗の名なり。細楷の字法正しく、筆力枯勁にして脂粉の気なし。吾れ其の保存の行届きたるを言うに、老婦人は家の宝に候えよとあり。誠に殊勝の人なり。なお小栗の詩稿あるべしと思ひて、まだ有るならば、写物の朱書などあるを見せ給えと頼みて

幾度も幾度も庫の中より取り出されしを檢せしも、然るべきもの見られず、相手は老婦人なり。初対面の身とて、強いて幾度も請うを得ず、必ず有るべしと思われし小栗の詩稿は、遂に見るを得ず残念なり。我れ反故の中より、南冥・曇栄・昭陽の書なども撰り分けて、これらすべて小栗の祖父の筆跡なれば宝を守り給えと、こまめに伝えれば、老婦人も心おちつきしか、小栗の墨画数多を取り出して、其の中なる一幅を予に贈られたり。

小栗の居間は、と問えば、海に面した二階に引けり。中二階ありて又その東に二階あり。皆、海に面したれば、景色いと好し。残の島鹿の島は前に横たわり、今津の山

亀井少栗伝余録

左手に突き出し、妙見岬は松原を隔だて右手に遥るか打霞あり。老婦人は茶を煮て少栗の有りし世の面影、見聞せし故事など物語る。みな耳新しき話に、才子佳人の昔をしのびつつ、今はと辞して帰途に就きぬ。老婦人は二女あり。一は昭陽の曾孫なる千里の弟八斗を婿として家を嗣がしめ、一は今は大阪に在り。一人の孫女と留守を守れりという。

帰途は生の松原にて、携え来たる弁当を開きぬ。
天囚は右の記事を明治四十年十二月、朝日新聞「亀門の三女傑」の中に紹介する。このほか著書多数。

明治四十五年七月、明治天皇御。九月に「誅辞」を発表。名文として知られる。

大正五年、京都大学講師となる。

大正八年五十五歳、朝日新聞社退職。

大正九年五十六歳「支那文学」研究によって京大より文学博士を受ける。

大正十年、京大講師辞任。八月宮内省御用掛となり、東京に移居。

大正十二年五十九歳、九月関東大震災。

十一月「国民精神作興の詔書」を書く。大正十三年六十歳、一月、御講書始の控えとなる。同年七月二十九日死去。

十九日死去。

当館企画展「筑前閨秀・亀井少栗と二川玉篠」は、すでに昨年四、六月のことであるが、まだ余韻を引いている。その一つは、少栗と玉篠作品との新しい対面が引きつづき絶えないことである。

少栗作品は、本誌が以前から偽物多し、と記事にしたこともあって、会期後すでに十一人の方から作品十

四点の真偽確認を求められた。立派な表装で大事にされているもの、相

当に掛け古されたもの、さまざまであるが、幸い偽物はなく大いに助か

った思いと、お蔭で眼福という勉強をしたことになる。少栗作の多くは

自題で、くずし字がなく楷行書にとどまることが多い。これは少栗の学問が徂徠学（古文辞学ともいう）、その特徴として、漢唐以前の文辞と用字を自在に使用

していることにある。こうした難解もあってのことであるが、これはこ

既に消されている。大漢和は栗を古俗つまり、中国の昔の常用字である。少栗には、この方が似合いとなる。

少栗自題画のついでに、昭陽の画賛入りの絵も持参される。最近、認識したことは、さすが昭陽と思われ

る得意絶妙の賛に、あらためて感嘆し、思わず興奮するものがある。昭陽は、絵をしないので絵師作品

に賛を求められるのであるが、中にはどう書いて良いか、一寸苦しいものもある。これをアツと思われる美

事な賛辞を書いて絵を生きいきさせている。
二川玉篠は、相変らず父親の相近

（すけしか）賛の画題で、お三人で四点の拝見を恵まれた、相近の能筆

が娘の絵をそこなわない配慮がわかる。
相近自ら絵も出来る人で父娘合作

よりは良いと思う。合作品と相近自題画を並べて見るつもりである。
武士の家は後嗣がないと絶家。二

る作品である。玉篠作に偽物はなし。次は話題を変える。

かねて、亀陽文庫が出来て、亀井ものの値が急速に上昇した、と古書

と古美術商から言われていた。少栗と玉篠もこの中に入る。
こんどの筑前閨秀展では、値上り

よりも少栗作品が出なくなつたとされる。所有者の方が手放されな

めである。少栗展即商業に妨げありとなる。なるほど二、三の知り合い

店舗をのぞいて納得した次第である。いま骨董屋さんは、一般にバブル

崩壊で商品値下がり甚しいと嘆かれ、反対に少栗は値上がり、しかし

肝心の品物なしと悔やまれる。
以前から少栗作品の多いことは認識していたが、今回の展覧会で、仙

座候、と自ら述べるに至る。

また、白扇を一度に百本仕入れて

いることから見て、従来の依頼者持

参に変わり身したことになる。

六十歳死去、前年の作品は絵も書

も円熟の冴えが見られ、しかも多作

である。

九州の釈奠と孔子像

翠川 文子
(東京・川村短期大学助教授)

九州に於ける孔子のまつりである釈奠の初見は上代にさかのぼる。

『正倉院文書』(『大日本古文书』卷二所収)によると、天平八(七三〇)年薩摩国の国学の二月・八月の釈奠に先聖孔子と先師顔子の二人をまつり、国司から学生まで三十六人が参列したという。供物料に当てる稲や参列者の食料の記録もあるが、先聖先師に供える酒は一升ずつ、参列者には一人五合ずつなどと見える。

上代において釈奠の器物・式次第を整えたのは、天平六(七三四年)、十八年の入唐留学を終え、帰国した吉備真備であった。天平勝宝六(七五四)年二度目の入唐から帰国した吉備真備は、時の権力者藤原仲麻呂とあわず、大宰少貳、ついで大貳として九年間大宰府にいたが、この時唐から持ち帰った孔子画像・顔子画像を太宰府の学業院に置き、百濟画師に模写させたものを大学寮に置いたという(『江次第』注)。また、この学業院の像を都に運ぼうとする海上輸送の途中で、いつのまにか箱の

中から抜け出して元の場所に戻っていたということが重なったので、移動をあきらめ模写をしたという言い伝えもある(『民経記』寛喜四年一二三二年三月十六日条)。ともあれ、吉備真備の九年間の在府はこの地の釈奠が正しい器物・式次第で行われるうえで、意義深いことであつたといえよう。

ついで、貞観十八(八七六年)年の『三代格』によると、太宰府のみ他の国々と異なり、釈奠に孔子・顔子の他に関子鶯を加える事を確認している。この時期には、中央の大学では孔子と十人の弟子、地方の国学では、孔子と顔子のみをまつることが定着していたであろうから、太宰府は九州地方全体を官掌することで他の国学と差をつけたのであろう。現在、太宰府天満宮には孔子・顔子・関子鶯の銅像があるが、これは嘉永五(一八五二)年頃の作である。

この後は国学の廃絶のため、釈奠の記録はないが、宮中の釈奠が長い歴史の幕を閉じたわずかあとの応仁

の乱の最中の文明四(一四七二)年肥後の豪族で守護職の菊池氏が隈府城下に孔子と十哲をまつる孔子堂を建てている。その跡は、孔子堂という字名の残る菊池市高野瀬の「老人福祉センター」のあたりと考えられている。ここでは釈奠も行われ、新儒学を九州に広めた南禅寺の桂庵玄樹が文明九年二月上丁の釈奠に参列し、「菊城客舎上丁日 観孔廟春祀之盛礼」の題で詩を残している

は、「島隠集」上)。ここにあった聖像は、のち熊本の時習館に献納されたと地元では信じられているという(『菊池の孔子堂について』)。

江戸時代、九州各藩の藩校で孔子をまつっていたことが知られるのは次の諸藩である。

「筑前国」
福岡藩Ⅱ釈奠はしなかったが、正月開講日に聖像を掲げ、酒供物を供え、告文を読み、香をたき、拝礼のあと論語の講義を行った。修猷館高校に聖像(藤原典信画)現存。
秋月藩Ⅱ釈奠はしなかったが、正月六日の開講日に床の間に聖像を掛け供物を供えた。

「筑後国」
久留米藩Ⅱ二月・八月中丁に釈奠を行ったほか、毎月一日聖前に香をた

いた。聖像(孔子・孟子)は高良神社を経て明善高校にあったが、昭和十四年焼失。

柳川藩Ⅱ釈奠はしなかったというが、明治五年写の『釈菜之次第』がある。聖廟を設け、孔子像(朱舜水の将来した銅像)と十哲画像をまつった。孔子像は伝習館高校に現存。

「豊前国」
小倉藩Ⅱ釈奠を行った。初め藩祖の替のある画像、のち、「漢李敬明所鑄」の銘のある銅像を安置。幕末の兵火に焼失。

中津藩Ⅱ二月上丁に釈菜。藩主が祭主。聖像を安置する聖堂を館内に設けていた。供物・講論の記録現存。孔子像は杵築藩と同じか。

「豊後国」
岡藩Ⅱ釈奠不明。一月五日、学事始に孔子画像をまつり、『孝経』講義後拝礼。講堂の続きの間を聖像を安置する聖堂とした。

臼杵藩Ⅱ江戸時代は菅原道真を聖像としていたらしい。明治二年八月には藩主列席し、孔子をまつり、以後定例としたという。

日出藩Ⅱ春秋釈奠を行い藩主列席。詳細な釈奠次第現存。一月十二日の開講日に聖像に香をたき拝礼。孔子像は呉道子筆模写のものか。

能古博物館だより

佐伯藩 学校の一角に先聖像を安置。一月五日、開講日に香をたき拝礼後『孝経』講義。

森藩 二月積奠。諸藩の儀式を折衷して行ったという。

府内藩 祭典は行わなかった。一月十一日、稽古初に聖像を床の間に掛け、教授の講釈を行った。

杵築藩 二月上丁に孔子画像(片山東離が呉道子筆画を模写したもの)を掛け積菜。藩主・重役列席。

〔肥前国〕

佐賀藩 二月八日積菜。聖堂を設け、孔子・四配(顔子・曾子・子思・孟子)・六君子を安置。一月五日・六日、生徒は聖堂に参詣し記帳。聖像は鍋島報効会所蔵、県立博物館委託。

小城藩 一月五日の開校式に孔子鑄像に拝礼後経書講義。

鹿島藩 画像を講堂に掛け、春秋に積奠。

蓮池藩 講堂正面に神位を設け、孔子画像を掛け、藩主列席し、二月八日積菜。

平戸藩 二月・八月上丁積菜。孔子と十哲画像(藤原典信画) 松浦史料博物館に現存。

島原藩 学校内に先聖廟を設け、初め二月・八月のち二月上丁積菜。正月五日、開校日に孔子に拝礼。

大村藩 二月・八月上丁積奠。孔子・四配・先儒瀧口文治をまつる。五島藩 学校内に聖廟を設け、二月・八月積奠。

〔肥後国〕
熊本藩 積奠なしというが、孔子像二体現存。

宇土藩 正月開講の日、聖像に拝礼。〔日向国〕

飢肥藩 講堂上段の間を聖堂とし、孔子像を安置し、開校の日に供物を供えた。聖堂現存。木像現存か。

高鍋藩 正月開講の日、朱子像、または二程子像を合わせて掛けた。聖像を掛けたともいう。図書館に藩校との関係不明だが呉道子筆孔子像の版木がある。

〔薩摩国〕
鹿児島藩 別棟の聖廟があり、二月・八月積奠を行い孔子・十哲の木像をまつる。昌平校の儀式に倣う。像は昭和二十年の空襲で焼失。

昭和二十年の空襲で焼失。〔対馬国〕

厳原藩 初めは三月・九月の八日に聖像(鑄像か木像)に供物を供え、『孝経』講義。ついで春秋丁日孔子の神位を講堂に設け、供物を供えるようになった。年始開館式も同じ。

以上記した中にある積奠・積菜・正月拝礼などの内容は必ずしも異なる内容を指すものではなく、同じ内容である場合もある。各藩各々の解釈で、これらの語を用いているからである。

これらの藩校の他に郷校、儒者の家塾も多くあり、ほとんどのところで孔子をまつったと思われるが、佐賀の多久聖廟と長崎の中島聖堂を除き未調査である。ただ、日出藩調査に際して、文化財保護委員の辻満生氏所蔵の孔子像を拝見した。これは、呉道子筆のもの石川養拙による模図に帆足万里が賛をした画像(藩校か家塾のもの)を金子自仏が嘉永七年模刻し、同志に頒布したもの一つで、同地には他に二枚現存するといふ。高鍋図書館にも画像の版木があるように、学校以外にも孔子像は多くあったと考えられる。それらは、明治以降、今日に至るまでにほとんど見えなくなっているのである。この稿をご覧になった方々から情報をお寄せ頂ければと思う。

現在、積奠・積菜を行う所は全国で十指に満たないが、九州では佐賀県多久市で、財団法人『孔子の里』(理事長は多久市長)が組織され、聖廟を中心とした町づくりが行われ、昨年は孔子をまつる聖廟の修復があり、落成を記念して二百八十年余り

絶える事なく、続いてきた積菜(現在は四月・十月)が広く内外の参列者を迎えて行われた。

多久聖廟の初期の孔子像を譲り受け、聖廟神社を建ててまつった佐賀県江北町では、毎年四月二十一日、一昨年からは九月二十一日にも「孔子さんまつり」が行われている。

熊本県の泗水町では、孔子の生誕地の泗水県の名を町名に当てて百年余ということ、昨年の十一月には孔子立像を安置する「祀聖亭」を中心に据える「有朋の里」孔子公園が完成オープンになり、中国曲阜から指導者を招き、孔子まつりを行い、本年以降も続行予定とのことである。

この孔子像には、泗水県の石を用い、工事も日中両国の共同で行ったといふ。

長崎の中島聖堂(興福寺に移築現存)では、昭和四十年代から五十年代にかけて六・七年多久に倣って五月最終日曜日に積菜を行ったが、現在は絶えたままである。孔子一族や門人等の他に類を見ない立派な位牌を納めた聖堂は、昨年の台風被害を受け修復が待たれている。なお同じ市内の華僑の方々の建てた孔子廟では、毎年九月二十八日に孔子祭が行われている。

長崎の中島聖堂(興福寺に移築現存)では、昭和四十年代から五十年代にかけて六・七年多久に倣って五月最終日曜日に積菜を行ったが、現在は絶えたままである。孔子一族や門人等の他に類を見ない立派な位牌を納めた聖堂は、昨年の台風被害を受け修復が待たれている。なお同じ市内の華僑の方々の建てた孔子廟では、毎年九月二十八日に孔子祭が行われている。

長崎の中島聖堂(興福寺に移築現存)では、昭和四十年代から五十年代にかけて六・七年多久に倣って五月最終日曜日に積菜を行ったが、現在は絶えたままである。孔子一族や門人等の他に類を見ない立派な位牌を納めた聖堂は、昨年の台風被害を受け修復が待たれている。なお同じ市内の華僑の方々の建てた孔子廟では、毎年九月二十八日に孔子祭が行われている。

長崎の中島聖堂(興福寺に移築現存)では、昭和四十年代から五十年代にかけて六・七年多久に倣って五月最終日曜日に積菜を行ったが、現在は絶えたままである。孔子一族や門人等の他に類を見ない立派な位牌を納めた聖堂は、昨年の台風被害を受け修復が待たれている。なお同じ市内の華僑の方々の建てた孔子廟では、毎年九月二十八日に孔子祭が行われている。

長崎の中島聖堂(興福寺に移築現存)では、昭和四十年代から五十年代にかけて六・七年多久に倣って五月最終日曜日に積菜を行ったが、現在は絶えたままである。孔子一族や門人等の他に類を見ない立派な位牌を納めた聖堂は、昨年の台風被害を受け修復が待たれている。なお同じ市内の華僑の方々の建てた孔子廟では、毎年九月二十八日に孔子祭が行われている。

原 采蘋を語る小文

孔子の教えが日本に上陸して千四百年余であろうか、孔子をまつるようになってからも既に千三百年になろうとしている。孔子の教えの原点である『論語』は、さまざまな切り口の故に時代・国を越えて現在も多くの人に読み継がれているが、九州における孔子のまつりの状況から、そのことの一部が理解されれば幸いである。

原采蘋に関する評は数多くある。故郷、秋月城下町には昔からの説話が、いまでも語り継がれる。

まず、采蘋が生涯独身を通して詩書を良くしたこと、多分の同情がある。采蘋の容貌と容姿について、瓜実顔の秀麗美人で背丈高く、内置き豊かなひととなり、と、晩年の采蘋に対面した古老が語られたとする。

采蘋は、寛政十(一七九八)年四月、秋月藩の儒者原震平(号は古処)の第二子(兄瑛太郎五歳、三年後に弟謹次郎出生)に生れ、晩年旅先の長州萩城下で安政六(一八五九)年十月朔日死去、享年六十二歳である。

彼女は人生の大半を旅に過ごしている。即ち、二十八歳で出郷、京都

滞在中に父古処の病報を得て帰郷、父の看護に当る。文政十(一八二七)年正月父死去、父が病中から采蘋の東遊を固く遺命したこともあって、同年六月江戸を志す。

道中は悠々の旅で、中国路、東海道を上るが途中、父古処の旧縁と道中で紹介を得た学者文人を訪ねる。

とくに福岡の亀井南冥、昭陽父子に学んだ父の学友などに手厚い待遇を受ける。翌文政十一年冬に江戸着、旅中一年半という、さながら行楽の旅とされる。以来、江戸にとどまり

此の間、関東諸方を訪ねて、詩想を豊かにしたと思われる。実に、采蘋三十歳から五十一歳の二十年を越える江戸中心の生活である。

この間の文政十二年十一月二十五日、著名の儒者「松崎慊堂」から、次のような勸告を受けた。「前文略……つまらぬ交際を止めて良に従う(夫を得ること)のが良い。または宮仕え(將軍、大名家の奥向きに仕える)を五、六年することで賜金を貯えて

国元に残した母親を迎えれば、最近の浮き名は、きつと才女の評判に変わると思う、と。

これに采蘋は、答えず、間もなく、宿舎にする稱念寺を去っている。

天保八年二月、亀井塾で旧知の広

瀬旭荘(淡窓の弟)が東上する。これで絶えていた采蘋の消息が、明るい登場になる。

采蘋は自詩に次の通りいう。

「西州の人。逢う毎に恋々の情、窮まる無し。何ぞ況んや、旧来の交宛ら、春風に対する如し。客たる他日の恨。氷穂の意融々たり。出遊す墨水の浜。緩歩萬華中……以下略」

旭荘の長期滞在に交際を共にしたことがうかがえ、また艶詩とされる内容がある。旭荘、西帰の後である

が采蘋に深い交際の人士が見られ、この人物と死去による別離が生じた際、切々とした愛恋の詩文を見るが省略する。

旭荘との詩にもうかがえるが、とかく詩には美的な情感の誇張を伴うものである。采蘋も詩書によって費金を得る作詩と、自分にとどめる詩との区別は心したと思われる、ただ采蘋が旅寓に死した遺稿には後者があつたとされる。

采蘋が旅の宿で、急性の痢症で急逝する際に、唯一の付添いをした長州藩の土屋蕭海は、妻の兄が豊後出身の長三州で、三州は長州奇兵隊に属し、最も他事多難の身、蕭海もまた、師の吉田松蔭刑死の悲報を耳にしながら、采蘋死後の始末を一身に

背負ったのである。

采蘋の遺言は、自分の死を故郷秋月に伝える必要はない。ただ、父古処の詩集遺稿を然るべき方法で上梓(本にして出版すること)の依頼と、もし余裕あらば自分の詩稿を父詩集の後に付けて貰えば幸いという。自分

は貴君の菩提寺の一隅に埋葬いただければ……というだけであった。

蕭海は、采蘋の言葉の通り萩城下の光善寺に「孝愍齊女原采蘋君墓 安政六年己未十月朔日没年六十二、土屋根建」と、蕭海の書を刻して建墓したのである。

ただ、父古処詩集と采蘋詩稿であるが、万延、文久、元治と劇しく年号が移る中で長州一藩死活の激闘がつづく。これに蕭海自身も元治元年三十六歳死去。このため古処詩集と采蘋遺稿も世に出ず終わる。

ただ一つ亀井南冥愛用の印「東西南北人」を南冥の死後、昭陽は原古処に遺贈する。古処は娘采蘋の東上に同印を渡す。采蘋死を看護した土屋蕭海は、これを義兄の長三州におくる。

以上、南冥遺愛の印は、これを得た各人の書に使用されて事実を証明することになる。

現在、同印は秋月郷土館に保存されている。

能古博物館だより

亀陽文庫「孔子聖廟」創建の意義と歴史的な楷樹の移植

明治の先覚、また実業家として我が国に近代的な株式会社と銀行制度を導入したことで知られる渋沢栄一氏は、常に中国の学術、とくに論語の熱心な愛好者でもありました。

渋沢さんは一体論語から何を学びとったのか、かれはこの書を通じて道徳と経済の合一、また愛情による経世済民(世を治め民を救う)こそ万事の基本であることを知り、産業社会にその認識を強く訴えました。

今日、パブルの崩壊を身をもって味わった産業者のだれにも共感される主張であります。

渋沢さんは、北九州の安川敬一郎さんから福岡の先儒亀井南冥『論語語由』と子息昭陽の『語由述志』とを借覧し、その優れた内容に感動して、この両書を復刻刊行し、広く友人知己に頒布されました。こうして渋沢さんは福岡にも深い縁故をもたれるのです。

いま幸いに亀陽文庫では、由緒ある「孔子像」を所蔵しております。そこでまず小聖廟を建造し、春秋二季の積奠を例会行事としながら、改めて産業社会に節度ある経済行動と経世済民の正しい認識を呼びかけ、

亀陽文庫の趣旨にそいたいと思いません。そのために専門家による論語の講演会など行うことにいたします。なにとぞ会員各位に御了承と、また広く御賛同を賜りたく存じます。

◎孔子聖廟と銘木「楷の樹」悠久二、四七〇年を越えて

『孔子廟』には楷の樹が植えられます。わが国では野生としてありません。中国原産・ウルシ科の落葉喬木で漢名「楷、楷樹・黄連樹」、和名は「孔子の木。楷の木」と呼ばれ、この木がわが国に入ったのは、大正四年(一九一五)のことで、当時の農商務省林業試験場長を務められた白沢保美博士が、山東省曲阜の孔子廟より種子を持ち帰り、播種し育てられました。

この時の記録書に「曲阜孔子ノ墳墓上ニ直径三尺ニ達スル大木アリ。同所ニ子貢(孔子の愛弟子)手植ノ楷ト称スルモノハ即チ此ノ樹種ナリ」とされています。

成木となり、花を付けるまでに二十年以上かかり、また雌雄異株のため花が咲いても一本の木では結実しない、と。

『山東通誌』に、「孔林有子貢手植楷樹圍一丈枯而不死」と、孔門十哲にされる子貢が植えた楷樹の繁茂を

亀陽文庫・能古博物館友の会

- (福岡市) 天谷千香子③・西嶋洋子③
- 岡部六弥太③・坂田泰滋③・鬼塚義弘③
- 村上靖朝③・片倉静江③・星野万里子③
- 小田一郎③・速水忠兵衛②③・亀井准輔③
- 桑形シズエ③・吉村雪江③・財部一雄③
- 橋本敏夫③・田上紀子③・三宅碧子③
- 安松勇一③・上田良一③・西村忠行③
- 高田浩二③・片岡洋一②③・桑野次男③
- 玉置貞正③・山内重太郎③・星野金子③
- 石川文之③・木戸龍一③・中畑孝信③
- 黒川邦彦③・若重二郎③・西島道子③
- 吉原湖水③・原重則②③・石橋七郎④③
- 藤木充子③・和田慎治③・西川真澄③
- 岡本金蔵③・青柳繁樹③・横山智一③
- 末松仙太郎③・板木継生③・行成静子③
- 池田邦夫③・浦上健③・宮崎集③
- 都筑久馬③・古村陽子③・斎藤拓③
- 石橋観一③・桃崎悦子③・古野開也③
- 西正恵②・岩下須美子②・安永友儀②
- 土屋正直②・磯崎啓子③・森真吾②
- 三角健一②・織田喜代治②・甲本総太②
- 大神敏子②・上田博②・鶴田スミ子②
- 鍋山駿一②・岸洋子②・大串梓
- 林十九郎②・古賀清子②・前田静子
- 田中和子②・近藤紘②・長八重子
- 井村明子②・黒川松陽②・谷健太郎
- 伊藤康彦②・石橋清助②・田中寿夫
- 花田郁子②・塚本美和子②・日野和子
- 西尾健治②・野口善和②・寺岡秀美
- 隈丸清次②・肥田隆②・松尾裕
- 原田種美②・長尾茂穂②・奥尾治郎
- (前原市) 由比章祐③(大野城市)
- 伊藤泰輔③・田代直輝③・藤穂積
- (春日市) 後藤和子②(筑紫野市)
- 横溝清③・脇山浦一郎③・川浪由紀子③
- 原富子③(太宰府市) 中村ひろえ③

- 古賀謹二③・佐々木謙③・大谷桂介②
- 平岡浩②・西尾弘子②(筑紫郡)
- 結城慎也③③(粕屋郡) 神崎憲五郎③
- 榎田正己③・榎田猶子③・酒井俊寿③
- 青木良之助③・友野隆②・鈴木惠津子②
- (宗像市) 木村秀明②・益尾天嶽
- (甘木市) 佐野至③・酒井カツヨ③
- 具嶋菊乃③・宮崎春夫③・井手太③
- 田中トクエ②・富田英寿②・井上清③
- (朝倉郡) 鬼丸雪山③(飯塚市)
- 小山元治③(浮羽郡) 吉瀬宗雄③
- (大牟田市) 嶽村魁③・古賀義明②
- (苅田町) 木下勤③(北九州市)
- 片桐三郎③(久留米市) 庄野陽一③
- 野瀬邦夫(直方市) 山本利行③
- (佐賀県) 甲本達也③(大分県)
- 寺川泰郎(熊本県) 浜北哲郎③
- (山口県) 犬塚博久②・平野尊識②
- (大阪府) 小山富夫②②・前田敏也子②
- (愛知県) 杉浦五郎②・庄野健次②
- (神奈川県) 中野晶子②③(東京都)
- 片桐淳二③山根貞与②③村山吉廣②
- (千葉県) 森久⑤(埼玉県) 間所ひさこ
- (石川県) 丸橋秀雄②(宮城県)
- 田中信彦③(北海道) 船越谷嘉一
- 【協賛会員(個人)】
- 片桐寛子(福岡)③・中村登(福岡)③
- 大里豊男(福岡)③・広瀬忠(福岡)③
- 笠井徳三(福岡)③・永田蘇水(福岡)③
- 菅直登(福岡)③・大坪正治(福岡)③
- 野口一雄(福岡)③・奥村宏直(福岡)③
- 荒木靖邦(福岡)③・早船正夫(福岡)③
- 安陪光正(福岡)③・浄満寺(福岡)③
- 花田加代子(福岡)③・梅田光治(福岡)③
- 沖双葉(福岡)②・熊谷雅子(福岡)
- 七熊澄子(太宰府)②・木原敬吉(飯塚)③
- 大久保津智夫(嘉穂)③・庄野直彦(直方)③

伝えていきます。

この白沢博士によって育成された楷樹は、育成後の種子、或いは分苗によって、次に植えられました。

△林野庁林業試験場

△湯島聖堂「東京都文京区」

△乃木神社「東京都港区」

△井の頭公園「東京都武蔵野市」

△蒼梧記念館跡「東京都太田区」

△渋沢史料館「東京都北区」

△足利学校「栃木県足利市」

△浦和市立公園「埼玉県浦和市」

△閑谷学校聖廟「岡山県備前市」

熊本大学医学部「熊本市」

同樹の石柱に「支那曲阜孔子墓前

伝子貢手植ノモノヨリ得タル種子ヲ

以テ：以下略」とする。

△旧制第七高等学校造士館「鹿児島

市」(昭和二十年空襲に焼失)

△多久聖廟「佐賀県多久市」

右の楷樹に関する記事は、すべて「多久丹邱会世話人」服部政昭氏の記述によるもので(勅)「孔子の里」発行誌から抄出しました。

以上、わが国の孔子廟にまつわる楷樹の由来を述べました。

亀陽文庫が今回の能古博物館園内に創建(四・三m×四・三×の木造建、本瓦葺屋根)する孔子小廟、これに重要な銘木「楷の樹」に至る好因縁は、専ら本誌前号「孔子をまつ

ること」および此の号「九州の釈尊

と孔子像」の各題で御寄稿を得た東

京・川村短期大学の翠川文字先生、

また多久市郷土資料館館長・尾形善

郎氏と多久丹邱会世話人・服部政昭

氏の高配による外はなく、ここに厚

く感謝を申し上げる次第です。

とくに、尾形、服部御両氏には実

に亀陽文庫創立以来の御協力をいた

だき、今般は「貴重な楷の樹(六年

生)を当文庫聖廟に植樹せよ」と去

る一月十六日、御持参、寄贈を得ま

した。いま、あらためて楷樹の歴史

の由来を知り、かつ今回いただいた

樹苗が、遠く中国の曲阜孔子墳墓に

現存する二、四七二年という「時空

をこえた」聖樹が大正四年わが国に

渡り、さらに多久を経て当園内の孔

子廟に移り得たことを思うと真に身

の引き締まる思い、というほかはあ

りません。

小廟の完成と楷樹の植成の傍らに

必ず以上のことを石彫にして将来永

く地域の誇りとして孔子精神(論語)

を伝えることを期します。

なお、楷樹苗は亀陽文庫創始者貞藤翁からの縁故がつづく庭園師小川恒之氏(技能功労・大臣表彰者)に委託、館園の聖廟用地造園等が完成後に移植します。

原田國雄(宗像)・森光英子(久留米)

江崎正直(大牟田)②・緒方益男(佐賀)③

中山重夫(唐津)③・七熊正(佐世保)②

七熊太郎(佐世保)②・伊藤茂(芦屋市)②

小堀定泰(滋賀)②・西村俊隆(東京)③

白水義晴(東京)③・多々羅幸雄(千葉)③

会員ご氏名に③は、会費ご継続三年目をいただいたしるしです。

(一)は多年分のまとめお払い込み、(二)は増口数ご負担を示します。

【協賛会会員(法人)】

流通共済(株)・花田積夫(福岡)

タイム社印刷(株)・安部栄一(福岡)

株笠(株)・組笠忠夫(福岡)

博多ちくわ(株)・魚嘉・松尾嘉助(福岡)

権藤税理事務所・権藤成文(福岡)

協通配送(株)・今林昇(福岡)

大谷運送(株)・南誠次郎(福岡)

山谷運送(株)・山谷悦也(東京)

株三島設計事務所・三島庄一(福岡)

西尾トラック運送(株)・西尾秀明(福岡)

日西物流(株)・原重則(福岡)

東洋特殊機工(株)・西尾敏明(福岡)

橋詰工務店・橋詰和元(福岡)

愛宕建設工業(株)・野村六郎(福岡)

九州三菱ふそう自販(株)・宮崎慶一(福岡)

(有)愛光ビルサービス・野田和禮(福岡)

(有)クリーン開発・野田和禮(福岡)

延寿産業(有)池田邦夫(福岡)

西日本急送(株)・原重則(福岡)

※新規の御加入(先号以後、平成五年一月十日まで)は、右の地区ごとに記載いたしておりますので、何卒御芳名を御確認下さい。

友の会 年間3千円

(館の活動、館誌購読と催事企画に参加)

自然と文化の小天地創造

能古博物館の会

協賛会(個人) 年間1万円

〃(法人) 年間3万円

〔館維持、資料収集、施設整備等の資〕

〔金援助を受ける〕

納入方法→郵便振替 福岡3160970

財団法人 能古博物館

右の会費受領は、その都度本誌に掲載

以後会費相当期間を名簿にします。

お願い→送金は振替用紙(送料加入者

負担)をご利用下さい。用紙はご連絡

次第お送りします。

当博物館の活動、また絵画・古文書資

料など当館に皆様の支援をお寄せ下さい

図書出版

『関秀 亀井少葉伝』

詩、書、画の作品で仙厓の次に多

いのが同時代の亀井少葉。しかも

少葉には艶麗な漢詩の恋歌まであ

る。これが同女の作か否か。これ

に始まる探究の書である。

B5版・表紙布装美本

限定一、一〇〇部

図録全カラー50頁・本文94頁

直売頒価 三、〇〇〇円

(送料 三一〇円)

館園・冬木立と神氣

亀陽文庫・能古博物館からの眺望は、東南の視界に限られる。これは博多湾海を越えた福岡市の南、中央、城南、早良、西の



街区、この背景に粕屋、筑紫、早良、糸島の各連山が一望にできる。この中に那珂川町の山、その先に佐賀県「吉野ヶ里」の裏丘陵がうかがえる。正面、愛宕山を置いて油山の広がり、その左右は背振山のつらなり、早良の飯盛山から雷山と山々の名を呼べば切りがないほどある。目を転ずると、やゝ眼下に館内の中央となる山丘の広葉樹林は一部の照葉樹を除き、落葉した冬木立とな

り、その透き間から糸島水道と糸島の山々が見える。これは冬場だけのものである。館内の丘陵は、千坪たらずでありながら、桜、くぬぎ、野ぐるみの古木が中央に集中し、葉の茂みを落としながら、かえって神氣

を感じるものがあろう。こうした冬木立が三月上旬には生々しい緑に変わり始める。よく言われるウイトンチット、森林浴の季節である。新芽を害

虫から守るため樹々が自ら放つ香気というが、この木立の中に入ると肌身が実感するのである。この東南面に、現在予定されている「文庫聖廟」が建つ。また前頁に述べた「楷樹」も植栽されるのである。

寄付受領の明細

(図書) 筑前国全図(タテ一四三センチ・ヨコ一五八センチ)

寄付者 西区姪浜三一一―一二一

石橋 観 一様

全面手書き。郡別に淡彩色を施す。内容は、すべて毛筆墨書である。美濃版紙半切を二十六枚つぎ合せ。全面糊ばなれの状態を表装師による継ぎと裏打ちにより原装にもどす。筑前国図は、元禄期すでに板刻されているが、本図作成の年代は、極めを得ていない。地名など、委細を資料照合して本図の作成時期を推定したいと考えている。

手慣れた書き込みなどから見て、専門職によると思われる。来館者の多くが、自分の出所など熱心に見つける努力をされる。これがわかると「アッ、ある、ある」と発声される。大勢の場合は、ほとんど皆さんがされるので賑やかな情景になる。手書き、というのが多分に感興を大きくしているように見受けられる。

(絵画) 染色「達磨像」

寄付者 東区若宮四一―一五―二六

大山宇一様

大山さんの作品は、抽象でむつかしすぎるといわれるが、今回の受贈作は、具象よく禅達磨の厳しい修行がしのばれる。「直心是道場」の字も格調ある書法である。

大山さんは、姪浜川柳会同人でもあり、自ら達磨像作品に川柳句題とされ、「起承転結達磨転んで決めている」の句がつけられ、これに同好の替七句を伴う。絵画と川柳八句を一つに展示を求められている。

このため表装仕立て後の四月に出展の見込み。本誌次号(四月刊)に写真発表する。

なお、次号で「大山さん」の今回作品の制作方法など詳しく紹介する。

・能古博物館ご案内・

開館 9:30~17:00 (入館16:30まで)
 休館日 毎週月曜
 (月曜日が祝日の場合は次の日)
 12月29日~1月2日
 入館料 大人300円・中高生200円
 交通 姪浜 能古行渡船場→フェリー(10分)
 →能古(徒歩5分)→博物館
 〒819 福岡市西区能古522-2
 ☎(092) 883-2881・2887
 F A X (092) 883-2881